(C)沖縄タイムス社

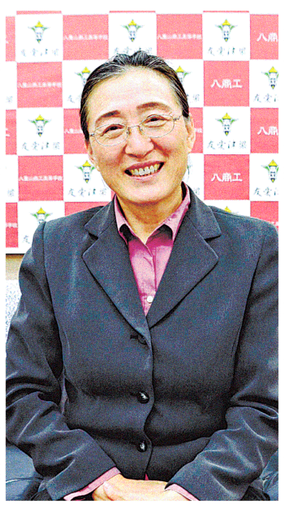
第60回沖縄タイムス教育賞 20日に贈呈式・祝賀会

人づくり 豊かな工夫

県内の教育分野で優れた研究、実践を続け、顕著な成果を上げている個人、団体を顕彰する第60回沖縄タイムス教育賞に、２氏１団体が選ばれた。受賞者の活動や抱負を紹介する。贈呈式・祝賀会は20日午後６時半から、那覇市のパシフィックホテル沖縄で開催する。会費は大人3500円、中・高生千円、小学生以下は無料。問い合わせは沖縄タイムス社読者局文化事業本部、電話098(860)3588。

中国語指導 楽しく26年

学校教育部門



「生徒は自己実現の場があれば伸びる」と話す石垣麗子さん＝石垣市真栄里の八重山商工高校

石垣麗子さん(63)　県立八重山商工高校中国語教諭

八重山商工高校で26年間にわたり中国語を教えている。中国山西省出身で中国語を母語に持つ。一方、来日前は現地の大学で日本語を学び、地元の高校生を相手に日本語を指導した経歴も。「教育の仕事が好き」と目を輝かせる。

商業と工業系の学科に分かれ、中国語は履修が必要な語学の選択科目。このうち商業科の観光コースは必修となる。１９９７年に着任して以来、カリキュラムの大きな一角を臨時的任用職員として1人で担う。

授業では発音から始め、読み、書き、和訳、会話と段階を踏んで教える。ただ「中国語を楽しんでもらうことが基本」として生徒本位の学びを重視する。中国文化などの紹介を織り交ぜて興味関心を引き出す。

中国語検定の取得にも当初から注目。教科書の範囲だけでは知識が足りないと、放課後に学習会を立ち上げた。中華圏からのクルーズ船が２０１２年に初めて寄港すると、「通訳ボランティア」を名乗り出て生徒たちを派遣。行政から活動が認められ、石垣島マラソン、プロ野球キャンプなどでも派遣依頼が届く。

「勉強に行くつもりでやっている。台湾からの観光客には逆に言葉の練習相手になってもらっている」と笑う。こうした取り組みの結果、１９９８年からの検定合格者数は計３４６人に上る。このうち大学第２外国語１年履修レベルの４級は35人、同２年履修レベルの３級は６人を数える。国内スピーチ大会入賞、中国や台湾への留学にもつなげている。

技術研修で石垣島を訪れたのを機に96年、島の男性と結婚。日本国籍を取得した。中国名「馬麗萍」から「マー先生」と慕われる。受賞に「八商工で働いて良かった。生徒は目標があれば頑張る。今後も生徒の可能性を少しでも伸ばしていきたい」と感謝し、喜んだ。

（八重山支局・粟国祥輔）

◇　◇

いしがき・あいこ　１９５９年中国山西省生まれ。中国山西大学日本語学科卒業。来日後の２００２年３月に県立沖高校通信制課程、10年３月には佛教大学通信教育課程文学部中国語中国文学科をそれぞれ卒業し、教員免許を取得した。１９９７年４月から現職。

循環型水耕 生徒と研究

学校教育部門



水耕栽培「アクアポニックス」の安定栽培に取り組んできた越来中学校の大城拓馬教諭＝沖縄市の同校

大城拓馬さん(45)　沖縄市立越来中学校教諭

教員生活の約20年間はバスケットボール部の指導に励み、琉球ゴールデンキングスの岸本隆一選手などを教え子に持つ。同中ではバスケ部顧問と「アクアポニックスクラブ」を両立するため「分刻み」のスケジュールをこなしてきた。

生き物と同時に野菜を育てられたら楽しいだろう―というのが出発点だ。

生き物が住めるきれいな水質は、栄養が少なく野菜が大きく育たない。逆に水中の養分を増やし過ぎると生き物がすめなくなる。そのジレンマを解決するために、何度も失敗。コロナ禍では1年間成果が出ずに、作品展に出展できなかった年もある。「生徒と共に何度も心が折れかけた」と振り返る。

考えられる手段が全て失敗したことも。生徒たちには「諦めなければいつか光が見えるから次の手を考えよう」と言葉をかけた。

行き着いたのが、水質や餌を選ばないミステリークレイフィッシュ（ザリガニの一種）に米ぬかを与える形だ。餌ごとに飼育水の栄養素を測定。近所の米店で安価に入手できる米ぬかを原料にすると、葉野菜の発育が良くなることを発見した。約50匹のザリガニを飼育しながら、30日間で約15㌔のグリーンリーフ66株を安定栽培できるまでになった。粘り強い探究活動で、生徒も自身も大きく成長したと感じている。

（社会部・松田駿太）

◇　◇

おおしろ・たくま　１９７７年生まれ。今帰仁村出身。北山高校を経て富山大学理学部生物圏環境科学科卒業。２００４年に屋部中学校で採用。大宮中などで勤務し、17年から越来中に在籍。20年、県優秀教職員に選出。

島外の子 受け入れ育む

社会教育部門



島民や保護者らと一緒に卒業を祝う久高島留学センターの子どもたち＝12日、南城市知念久高

久高島留学センター　南城市久高区

南城市知念の久高区が運営する「久高島留学センター」では、不登校や人間関係に悩む島外の小中学生が親元を離れ、集団生活をしながら島の小中学校に通う。豊かな自然の下で島の子どもたちと学ぶ中で、社会性が身に付き、離島の教育環境や地域も活性化する。

設立は２００１年で、区は創設者と協力し、04年から運営に携わっている。これまで延べ257人を受け入れ、現在は8人が島民と交友を深めながら成長している。

運営は区長や小中学校の校長、PTA会長を務める島民ら9人が担い、市の補助金や利用者の月謝が資金となる。県外の子どもが多く利用し、運営委員が利用前に必ず親と面談して成長する意欲があるかを子どもに確認する。

センターでは集団生活に必要なルールを守ることが第一。規則は細かく、起床と就寝時間は決められており、携帯電話は禁止。食べ物は全部食べるよう努力し、勉強部屋ではしゃべらない―など。

運営に携わる島民の並里和博さん(70)は「子どもたちは共通の悩みを抱えており、支え合って生活できる場合が多い」と語る。毎年5～10人が1年間利用し、センターは毎年3月の卒業式後に修了式を開き、子どもたちは島民と一緒に成長をたたえ合う。

12日の修了式に参加した滝沢心さん(15)は長野県出身。「自分で考えて行動できる主体性が身に付いた。支えてくれた全ての人に感謝したい」と語った。那覇国際高校に進学し、海外での仕事を夢見る。

センター長の大城秀美さん(65)は「悩みを克服し、成長する姿は目を見張るものがある。学んだ知識や経験を生かし、島外でさらに成長してほしい」と子どもたちを激励していた。

（南部報道部・国吉聡志）

教育実践の奮闘伝わる

講評　上間正敦選考委員長

２０２２年度の沖縄タイムス教育賞は学校教育部門に９人、社会教育部門に２団体の計11件の推薦をいただきました。いずれも優れた先生方、地域団体の教育実践であり、人づくりの現場の創意工夫や奮闘ぶりが伝わる活動でした。

厳正な審査の結果、本年度は2個人1団体の受賞が決まりました。

越来中学校教諭の大城拓馬氏はアクアポニックスクラブ（科学クラブ）での特別活動で、科学的で独創的な研究に生徒と継続的に取り組み、地球規模の環境問題やSDGsに連なる課題解決に迫り、生徒の成長につながる点が評価されました。

八重山商工高等学校の中国語教諭、石垣麗子氏は26年間地道に中国語の指導を続け、検定試験に多くの生徒を合格させるだけでなく、観光地として注目される八重山の地域イベントを活用して、実践的な中国語を身に付けさせるなど地域に対する貢献度も評価されました。

南城市の久高島留学センターは01年に設立され、その後、久高区が事業を継承、山村留学を推進し、不登校や人間関係に悩む子どもも受け入れてきました。センターのほか学校、地域、行政区など島全体で関わり、学校の存続や地域の活性化に波及しています。

いずれも今日的な社会課題に教育現場から実践する取り組みであり、教育活動を核にした影響力の大きさ、その意義に感動いたします。受賞された皆さまにあらためて敬意を表します。

沖縄タイムス教育賞は本年度で60回を数えました。戦後いち早く始まった教育表彰制度で、継続性、独創性、貢献度、子どもとの密着度や子どもの変容、父母や地域社会との連携など六つの基準を十分満たすことを重視しています。

その分、受賞のハードルが高くなりがちですが、幸い、選考委員には小中高校の校長会会長や県教育庁、教職員組合の幹部や研究者ら教育のエキスパートがそろっており、アドバイスを得ながらより良い表彰制度を検討する考えです。

（沖縄タイムス社執行役員）